

教育
相談室

カウンセラーの窓から

子どもと話す時間を楽しみたい

子育て中の保護者が集まる場で、親子の関係づくりについてお話しする機会があると、次の親子のやり取りを紹介しています。

登校前の朝の会話 (A)

子「のおのお、お腹が痛い。」
親「困った感じで」えっ、どれくらい痛いの。」
子「うーん、分かんない。」
親「大したことないんでないの。何ともない。学校へ行けば治る。」
子「……。」
親「行ける、行ける。学校へ行けば治るって。」
子「ええっ……。」
親「早うトイレに行って、用意しないと遅れるよ。」

親も忙しくて気持ちに余裕がなく、「行ける、行ける」と紋切り型の対応になっていますが、普段の我が子「早うトイレに行って、用意しないと遅れるよ。」

が子の体調や顔色はちゃんと見ているのでしょうか。何となくお腹が痛いと言ってくる子を、重大な腹痛とは思えなくて、そんなことはないと言いつけて登校を後押しすることは、「そういえばあったなあ」と感想を述べるお父さん、お母さんは少なくありません。

ただ、中には朝の腹痛や頭痛の訴えがあり、子どもの発するSOSと察知して、親子でゆったり過ぎず時間を取ることも必要な場合があります。

では、「何ともない」と否定せずに、子どもの話した言葉を繰り返して受け止めてみましょう。

登校前の朝の会話 (B)

子「のおのお、お腹が痛い。」
親「あらあ、お腹痛いの。」
子「何かさつきから痛くなった。」

親「さつきから痛くなったの。」

子「うーん、分かんない。」

親「分かんないね。とりあえず熱を計ってみよう。……熱はないみたいやの。」

子「(ちよつとホツとして) 学校行けるかな。」

親「行けると思うよ。先にトイレに行ついで。」

子「うーん、分かった。」

会話は親が先に進めず、なぞりながら進めることで、子どもは今の自分の状態を分かってもらえたという安心感ももてるようです。これは、子どもが赤ちゃんだっ

た頃や、更に成長して片言を話せるようになってからも、泣き声に「え、どうしたの」「お腹すいたの」などと返事を返して、触れ合ってきた感覚に近いやりとりかもしれません。

こうして、話を聞き親が言葉にして感情を受け止めることで、子どもとの関わり方の土壌になる愛着関係は育まれていくと言われています。

コミュニケーションのツールは進化し、情報も豊富にあふれている今、子どもとの直接のおしゃべりを楽しみながら、周囲の大人も一緒に成長していきたいものです。

(T.S)



「はぐみ」は、家庭のあり方についてみなさんと一緒に考えていきたいと発行しております。子育てのヒントになればと思います。ご意見をお聞かせください。

鯖江市教育委員会教育政策・生涯学習課
TEL 53-2256
〒916-8666
鯖江市西山町 13-1

はぐみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖江支所

54号

人のかかありが 子どもを育てる



『秋を飾ろう』中河保育所



『お店ごっこの看板作ろう』鯖江東幼稚園



『幼稚園児とカレーライス作り』片上小学校



『職場体験』鯖江中学校

ゆったりと話せる

居心地のいい場所

だんだん話さなくなる子どもたち

子どもが大きくなっていくと、なかなか親と話さなくなるといふ声をよく聞きます。

全国学力学習状況調査では、「家の人と学校での出来事について話している」と答えた子ども（小六、中三）は半数弱。

なぜ話さなくなっていくのでしょうか。



あるお母さんの反省

日々の忙しさで、子どもにじっくりとかかわってやれていない。

「やってみよう」という子どもの気持ちを抑えて「これはしちゃだめ」「こうしなさい」と決めつけてしまう。

子どもが自分の思いを話すことも、伸びようとする力も、つぶしてしまっていることに、時々気づくだけ……。



子どもの居場所大切にされている実感

子どもは、叱られたり禁止されたりするよりも、自分の興味のあることや得意なことを認めてもらえる、ほめてもらえると居心地のよさを感じます。自分のことを大事に思ってくれる人だと実感できると、自分の思いをどんどん表現していきま



時にはひと息ついて

慌ただしく過ごしてしまいがちな「子育て」の日々ですが、時にはよそのお父さんお母さんたちや、おじいちゃんおばあちゃん、子育ての先輩たちと話してみ、いろいろな人たちと情報交換することで、心ゆとりが生まれ、我が子のいいところを客観的に見つめられるようになります。

家庭で、自分を大切にし、認めてくれる大人と話をする経験は、家族以外の大人との対話にも必ず発展していきま



おばあちゃんの読み聞かせ

ある保育士さんのお話によると、時々園に来てくださるおばあちゃんの読み聞かせの時、子どもたちの様子が違うのだそう。普段のお話は、静かに聞いている子どもたちが、その日はとてもにぎやか。お話の流れに乗って、大笑いしたり、登場人物に話しかけたり、自分の感想を口々に言ったりするので

心を解放して、自分の思いを素直に表現し、絵本やお話の世界に浸って楽しめる時間は、とても心地よいことでしょう。

おじいちゃん、おばあちゃんは、何をしても、にこにこ受け入れてくれる存在のようです。自分自身の子育て経験も、よその子育ても見えてきて、その経験からか、子育て真っ最中の親たちよりゆとりがあり、無条件の愛を注いでくれます。だから子どもたちも安心して自分を出せるのではないのでしょうか。



大人と話せない子どもや若者が増えている

「おいしい」「おもしろい」「危険を感じる」「悲しい」も、みんな「ヤバイ」？

仲間うちで通じる言葉は持っているけれど……人の目を見て話せないのに、SNSだと雄弁になる？全国の自治体で、相談電話にかけてくる人数が減っているところがあるそうです。子どもや若者が、大人と話すことをためらったり、うまく話せなかったりするからだとおっしゃいます。

ある自治体では無言電話もよくあるのですが、いたずらというより、話しやすそうな人を探っている感じなのだそうです。電話やメールでなく、SNSを使った相談ができる所も増えてきているようです。でも、大切な自分の気持ちを伝えるために、人に向かって話せることは必要ですね。



涓滴「ちょっとだけ挑戦を」

子どもには可能性があります。子どもに挑戦させていくことで、子どもは変わります。「勉強や部活動や好きなことに打ち込んだりするわけでもない。毎日だらだらと過ごしているばかりだ」。そんな思いをもちながら、我が子を見ていませんか。子ども自身も「どうせできるわけがない」と自信を失っている場合があります。

その原因は、大人の見方が影響しているのかもしれない。この子には、こんなことは無理だ」という見方が、子ども自身の可能性をなくしてしまうのです。そこで「ちょっとだけ挑戦」を提案します。

例えば、包丁を使わせたことがなければ、使わせてみます。「そんな危険なことはさせられない」と決めつけないでください。周囲の人と相談して、できるかもしれないという声があったら、ぜひ挑戦させてください。子どもは緊張しながらも、上手に果物の皮をむいたり、野菜を切ったりできるように変わっていきます。魚をさばくことに挑戦させてもいいですね。

きっと家中の人から称賛されることでしょう。家族旅行を計画したとき、コースを決めさせたり、切符を買うことを任せたりするのもよいでしょう。社会に出てから役立つ力が詰まっています。

学校でも、先生に「ちょっとだけ挑戦」をお願いしたらどうでしょう。まず、本人の気持ちを聞きます。「少し苦手なことに挑戦できないかな」と相談します。友だちに聞いてもらう・グループや全校生徒の前で話をさせてもらうとうとうどうでしょう。少しずつ挑戦のレベルをあげます。スマイルステップでよいのです。少しずつ挑戦していくことで、子ども自身の不安はなくなります。

「できない」と決めつけずに、「好きなことではないか」と聞いて挑戦させましょう。子どもは自信を持ちます。自信をもつと「自己肯定感」が育ちます。自分が好きになります。

子どもを伸ばす最大の環境は、子どもの可能性を引き出す大人の見方です。

※「涓滴」とは「じゅんてつ」という意味。じゅんも集まれば、やがて大河となることの願いを込めて。